

# 集落分布パターンの 変遷からみた弥生社会

Yayoi Society as seen from Changes in Settlement Distribution Patterns

若林邦彦

WAKABAYASHI Kunihiko

はじめに

①課題の提示

②集落分布類型の設定と変化

③列島規模での地域性とその変化(弥生中期後半～後期)

まとめ

## 【論文要旨】

大規模集落が複数の居住域から形成され、首長によって再編成された単一の集団として構成されていないという認識は一般化しつつあるが、それを基盤にした弥生社会像は明確ではない。本稿では、この側面に焦点を当て、近畿地方における居住域分布パターン設定と変遷を分析して、そのモデルを列島各地に適用させて解釈の進展をはかる。

分布パターン分析の結果、約10km四方内に複合型集落が複数形成されるA1類、単数形成されるA2類、中小規模集落のみ分布するB類に分類できる。近畿中部においては、弥生前期にはB類パターンが主体となるが、中期には、平野部ではA1類パターンが多くみられるものの、丘陵・段丘地形が発達する領域ではB類が主体となる。また、平野部でもA2類パターンの集落分布となる領域もある。つまり、弥生中期には、地形条件などによる集落分布パターンの差異が大きい。また、河内湖辺を典型例とする階層化した方形周溝墓群の多数形成はA1類型のような多核的な集落配置構造をもった領域で発達し、複合型集落の多数形成は大規模集落を中心とした単純なヒエラルキー形成には結びついていない。後期には、集落分布上の小地域差が解消され、全体として諸集団の分布形態は平準化されていく。こういった地域性の少ない集落配置は古墳時代には通有の景観であり、弥生時代の中で段階的に古墳時代的集落配置への変化が進行すると考えられる。

こういった近畿地方における集落分布形態の多様性を援用すれば、複合型集落の形成の様相や時期が列島内諸平野部において異なることは自然に理解できる。また、中・小規模集団の多核的複合化が顕著な集落配置が弥生中期において明確にみられるのは北部九州と近畿地方中部だけである。つまり、A2類型の単純な分布構造からそのまま古墳時代社会へ移行した地域と、多核的地域社会から古墳時代社会へと移行した地域ではその経緯も大きく異なっていた。

【キーワード】 弥生集落、複合型集落、分布パターン、ヒエラルキー、大阪平野

## はじめに

弥生社会論には重いくびきがある。古墳時代成立の前史を説明する媒体の役割である。古墳時代の社会構造実証の主体は墓制である。そこには様々な学説が展開されているが、列島規模で比較可能な「古墳」というカテゴリーは広域の社会構造比較を可能にしている。しかし、弥生社会理解にはそのような便利なフィールドは用意されていない。墓制や青銅器といった祭式は地域ごとに大きく異なり、儀礼・祭式を媒介とした社会理解だけでは、北部九州で総合的に構築された社会論が近畿地方や関東地方に適応できる保証はない。しかし、「如何に古墳時代社会が形成されたか」という問いから完全に逃れて考察を続けることはできない。墓制にうかがえる差異は階層差発現の度合いに結びつけられ、青銅器の型式学的類似性と分布現象の相関は広域社会統合の物差しともなってきた。土器地域性については、古代社会にまで連続する地域共同体の反映か否かが議論されてきた。長期比較が可能な土俵が成立するか否かも検証されずに。

筆者は、集落研究に関わる中で、この歪みを解消した上で考察を行いたいと考えるようになった。集落はどの地域でも堅穴住居・掘立柱建物などから構成され、個々の施設の形態の差異は住処・収納施設の集合体という側面に地域差はない。もちろん古墳時代に至るまでその要素に異動は少ない。空間・時間の制約は少なく比較可能である。しかし、一方ではそこには、生業・立地環境・社会的機能などの複合的要素が相関してくる。素材は比較しやすいが、証左の存在理由は無数に設定可能となる。しかし、好都合な属性つまり（その内容はともかくも）居住域の配置関係だけに絞って比較してみることに意義を見出そうとする手はどうだろうか。あえて個々の施設の存在理由を決定付けようとする枠組みから逃走して。実際類似した思考は、既往の議論でも展開されてきた。遺跡の規模だけから「拠点集落」「母村」といった分類を行い、小規模遺跡との分布関係から地域社会構造を考察する言説である。しかし、そこには所与の行政的遺跡名を集落と読み替え、規模と継続性から、「大」「拠点」「母」「都市」なる枕詞をつけることで遺跡を読み取るべき実態に変換するというバイアスを拭い去ることは難しかった。

筆者の提案は簡単である。できるだけこのバイアスを取り去って分析・解釈を進めたい。そのためには居住遺構が形成されている地点を地図上にドットして、その配列の様態を単純な高汎用性のあるパターンとして類別し、変化の方向に共通性を見つけてその他の考古資料を用いた社会理解の背景にしてしまおうというものである。もちろんその結果読み取りうる集落遺跡の類型には呼称を与えていく必要があるだろう。しかし、できるだけ配置関係だけを関係性を説明する基準としたときどのようなことになるのか。本稿はその試論を進めたい。

### ①……………課題の提示

弥生都市論〔広瀬1998〕を否定する意図から、この10年間、大規模集落の構造を分析する研究は多数発表されてきた。それらに共通する理解は、大規模集落が複数の居住域から形成され、決して首長によって再編成された単一の集団として構成されているのではないという認識であろう。

このような視点に立って、筆者〔若林 2001・2003・2005〕は大阪平野中部の大規模集落分析を通して、「複合型集落」「基礎集団」という概念を用いることによって、特殊な集落が形成されたのではなく、一般的な集団が集合してできる集落として理解した。秋山浩三〔秋山 2005・2007〕もこれに呼応し、大規模集落を農業経営上の要因から複数集団の集住が進んだ結果として論じている。近畿地方だけでなく、列島各地の弥生遺跡・遺跡群に関して類似した分析結果が報告・考察されている。

たとえば、小澤佳憲〔小澤 2000a・b〕や田崎博之〔田崎 1998〕によって、福岡平野や佐賀平野などの大規模集落での類似した状況が弥生中～後期に継続して形成されていたことが詳細に述べられている。また、中四国地方については、文京遺跡を中心とした松山平野の文京遺跡における中期後半の状況〔田崎 2006〕の提示もある。森下英治〔森下 2006〕によると善通寺市旧練兵場遺跡では弥生中期後葉～終末期にかけて、大規模密集型遺跡が形成されるという。山陰地方では、濱田竜彦氏〔濱田 2006〕によると弥生時代後期の山陰地方の妻木晩田遺跡群を中心とした分析がある。東日本の弥生中期後半では朝日遺跡を中心とした濃尾平野の状況〔石黒 2008〕、北陸でも同時期の八日市地方遺跡を中心とした平野部の状況〔福海 2002〕、松原遺跡を中心とした長野盆地の状況〔馬場 2007〕、折本西原遺跡を中心とした鶴見川流域の状況〔安藤 1991・2003〕が挙げられる。このようにみると、筆者の指摘した「複合型集落」を機軸とした社会統合は、弥生時代の社会構造を説明する上で普遍的な現象と捉えられ得るようにもみえる。

しかし、その認識を基盤にどのような弥生社会像が描けるかについての方向性は明確ではない。その要因としては、実際に大規模集落（筆者の定義づけでは複合型集落）をめぐる、諸地域社会の実態が明確に分析された例が僅少なことが挙げられる。つまり、大規模集落・複合型集落が一般中・小規模集落の集合体とするならば、諸地域における一般中・小規模集落の分布形態そのものが、弥生時代地域社会の構造を考察する上で重要な側面となるのではないか。しかし複合型集落が列島内のすべての地域・時期に明確に形成されているわけではない。さらに、複合型集落が確認されない地域について、その存否が地域社会構造のどのような差異を示すのかについては全く論及されていない。

本稿では、この側面に焦点を当て、近畿地方を素材にして、一定領域内どのような居住域分布パターン設定が可能で、それらがどのように変遷していくのかという問題を考察する。特に大阪平野を中心に分析を進め、類型化をはかりそれをもとに時期的な変化の持つ意味、列島規模での変化の方向性などについて考察してみたい。

## ②……………集落分布類型の設定と変化

### (1) 分布類型の設定—大阪平野を中心として

大阪平野全体の居住域分布を検証することで、集落分布パターンの類型設定を行いたい。この地域を選択する理由は単純である。国立歴史民俗博物館における共同研究事業において縄文・弥生時代の集落集成を行った結果、近畿地方において最も調査例の集積が多かったのが大阪府下であったからである。大阪府の面積は、全国都道府県の中でもきわめて小さい部類に属することを考えれば、

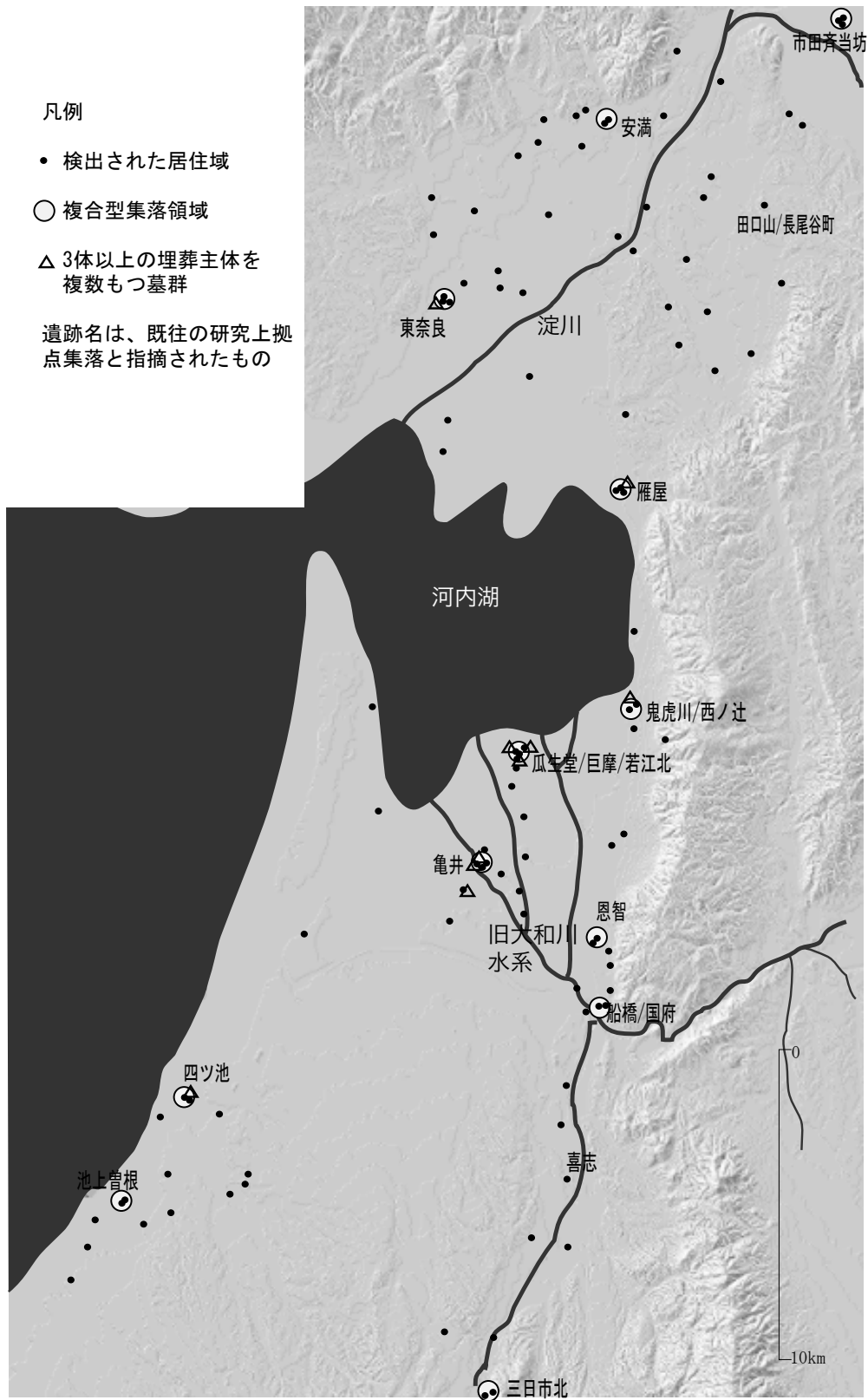


図1 大阪平野の弥生時代中期後半様相2期居住域検出地点

地域内で弥生遺跡調査例が最も多いのが当地域であり、現状では弥生時代の集落分布実態に最も近いデータと考えることができるからである。

図1は、大阪平野における弥生中期後半特に凹線文出現直後の居住域確認地点の分布である。筆者が行った既往の土器編年上〔若林2003〕では中期後半様相1とした時期に相当する。図中には、居住域の可能性の高い地点に黒丸記号を落としているが、筆者の既往の分析では、当該期の遺構形成の単位（基礎集団）は、径100～200m（40000㎡以内）に収まることが判明しており、その領域を超えて遺構や・遺物包含層などの形成が認められる場合は、複数の黒丸記号として表現している。つまり、黒丸記号が複数集積する範囲については複合型集落を形成しているゾーンと考えることができる。こういった居住域複合領域が確認できる部分には黒丸記号の背景に○の表示を行っている。

図1のうち、河内湖の南の居住域分布状況を一覧すると、雁屋遺跡、瓜生堂／巨摩／若江北遺跡・亀井遺跡・鬼虎川／西ノ辻遺跡・恩智遺跡・船橋／国府遺跡といった複合型集落（基礎集団近接複合ゾーン）が数km間隔で分布している。そして、その間に基礎集団もしくはそれ以下の規模の居住集団が分布する状況がうかがわれる。つまり、中・小規模居住集団が多数分布するこの地域では、すべての居住域が等間隔に分布するのではなく、一定の間隔でその密集領域が形成され、それが大規模集落として評価されてきたことになる。筆者による既往の分析〔若林2001〕で想定したとおりの居住集団の分布状況である。

また、淀川水系に目を転じると、淀川右岸の平野部には東奈良遺跡・安満遺跡といった複合型集落が5km程度の間隔で分布することがわかる。また、周囲には基礎集団以下の規模の集落が多数分布している。この領域に関しては大規模な発掘調査が僅少で中・小規模の発掘調査の報告書刊行も十分ではないため、遺跡内容が明瞭でないものも少なくない。このことは、さらに複合型集落と認定できる可能性のある遺跡があり得、基礎集団複合ゾーンが増加する可能性も考えられよう。いずれにしても、こういった分布状況は、旧大和川水系と類似しており、大阪平野中部での基礎集団分布とその密集領域形成のパターンが一般化できるように思われる。

しかし、淀川左岸の領域については、南端の雁屋遺跡と京都盆地の巨椋池沿岸部に所在する市田齊当坊遺跡の間に複合型集落のみられない領域が存在する。こういった集落遺跡の中で、星丘西遺跡・田口山／長尾谷町遺跡などは、従来拠点集落ともいわれてきたが、拙稿〔若林2007〕でも触れたように、複数の居住集団が近接存在している分布状況は確認できないため複合型集落とは呼びがたい。一方で、中・小規模の居住域形成は、淀川右岸と同じような分布間隔をしめす。つまり、弥生中期後半における淀川左岸は、基礎集団以下の規模単位の居住域形成は多数みられるにもかかわらず、それらが明確に近接複合して遺跡形成することのない領域だったと考えられる。

もう一つ、類似した居住域分布のみられる地域を挙げよう。大阪平野南部の石川流域である。

石川の北端に船橋／国府遺跡、南端に三日市北遺跡という2つの複合型集落の存在が想定できるが、その間の南北10kmにおよぶ範囲には、中規模以下の居住域分布だけが確認できる。喜志遺跡・中野遺跡・甲田南遺跡は居住域に近接して方形周溝墓群が形成されているが、居住域規模自体は径200mの範囲内に収まってしまう。喜志遺跡は二上山産サヌカイトによる石器製作の拠点とも言われるが、複合型集落とは呼べない遺跡規模である。ただし、遺構の状況の不明確で遺物分布などが



図2 明石川流域の弥生中期後半様相1期居住域確認

認められる遺跡を含めると、石川が形成する南北に長い平野部に面して2～3km間隔で基礎集団形成が行われていることが想定される。このような状況は、淀川左岸の居住域分布に酷似していると言えよう。

また、石川流域の南端部には、複合型集落と考えられる三日市北遺跡が存在するが、この遺跡を中心として集落配置を捉えてみた場合、10km四方内に複合型集落が一つしか確認できない状況がわかる。この状況は、拙稿で明石川流域（図2）について確認した状況〔若林2007〕と

きわめて類似している。

このような弥生中期後半の集落分布を一覧すると、集落分布を一定程度類型化することが可能である。特に一定程度の領域においてどのような集落形成のパラエティが見えるのかという視点で類型化を試みたい。

まずは、約10km四方内に複合型集落が形成される分布パターンをA類、まったく分布しないパターンをB類と二分することができる。A類パターンにおいても10km四方内に複合型集落が複数形成される場合とされない場合があり、前者をA1類、後者をA2類と細分することができよう。

A類型はいわば、集団複合の核が形成されている領域といえる。拠点集落論・城塞集落論・弥生都市論を唱える立場からは、以前から周囲の衛星的中小集落に対する経済・社会上の核として機能しているとされている。筆者の提案する基礎集団の複合体として大規模集落を説明する立場でも、中・小規模集団の近接分布した領域としての複合型集落は経済的側面（交換など）における社会関係が極度に複雑化し地域社会関係の中心ゾーンとして認めることができる。しかし、A1類型の集落分布パターンの場合には一定領域内に複数の社会的核ゾーンが形成されていることになる。こういった状況を示しているのは近畿地方においては淀川右岸・旧大和川水系・巨椋池近辺・奈良盆地などと考えられる。いわば、近畿地方中部の主要な平野部の多くにおいて認められるパターンといえよう。一方、一定領域内に単一の中心点しか認められないA2類は先に挙げた明石川流域以外には、服部遺跡などを中心とした野洲川流域などがその候補として挙げられる。

また、社会的核を形成しないB類については、先に挙げた淀川右岸域・石川流域のほかに、六甲山麓や木津川流域（図4参照）などが挙げられる。このうち前二者の地域に関しては、そのうち多くが径100～200m規模の集落が多く分布する状況であるが、後者二地域に関しては、さらに零細な径100m以下の規模の居住域しかもたない集落遺跡が多く認められる。複合型集落を作らない分

凡例      ● 検出された居住域      ○ 複合型集落領域

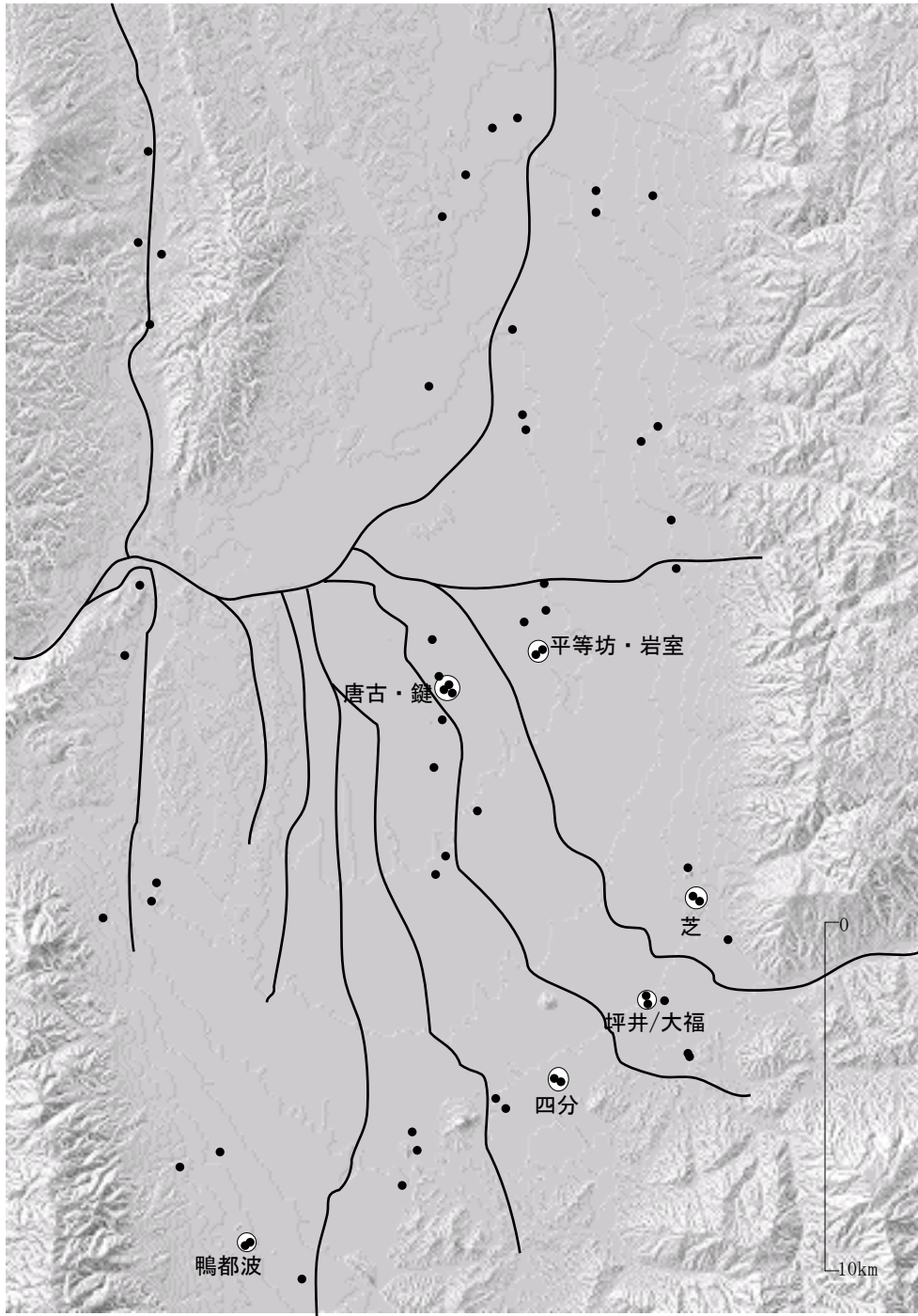


図3 奈良盆地における弥生時代中期様相2期居住域検出地点

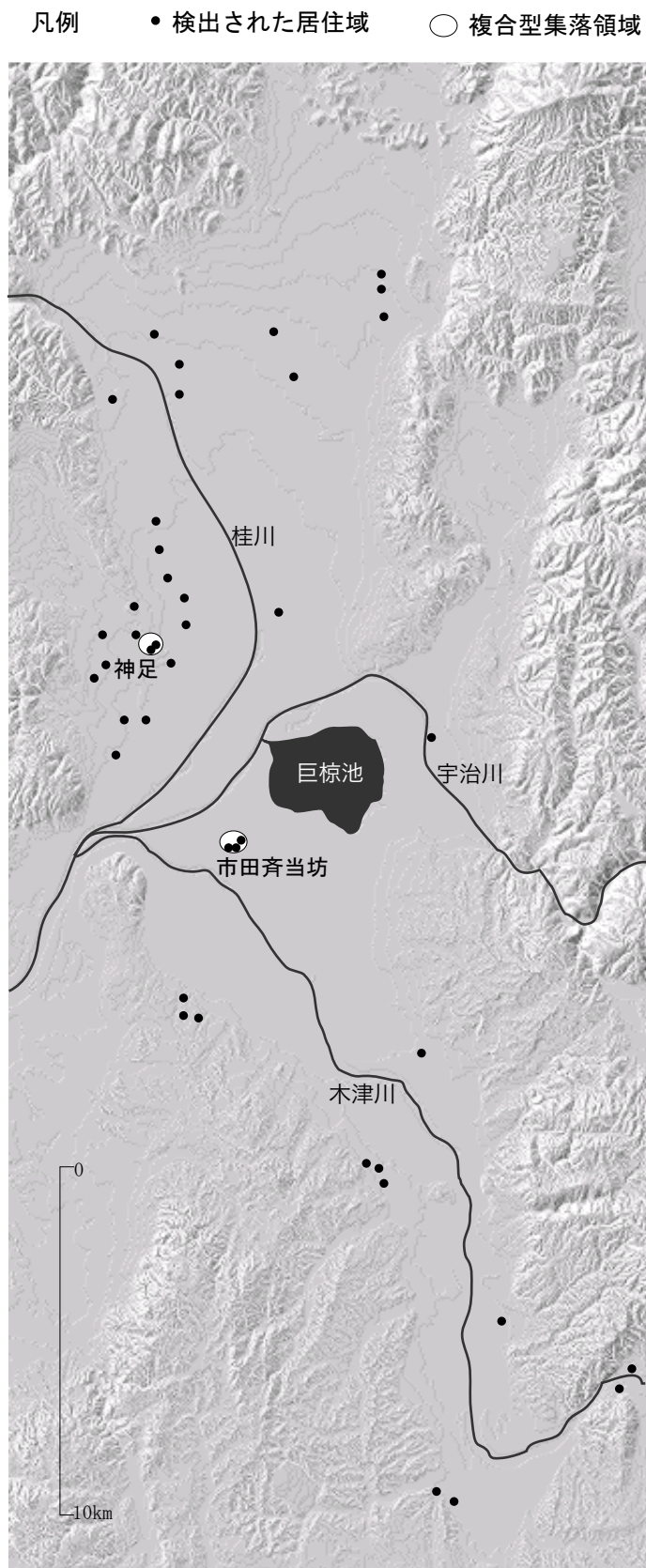


図4 京都盆地・木津川水系の弥生中期後半様相2期の居住域検出地点

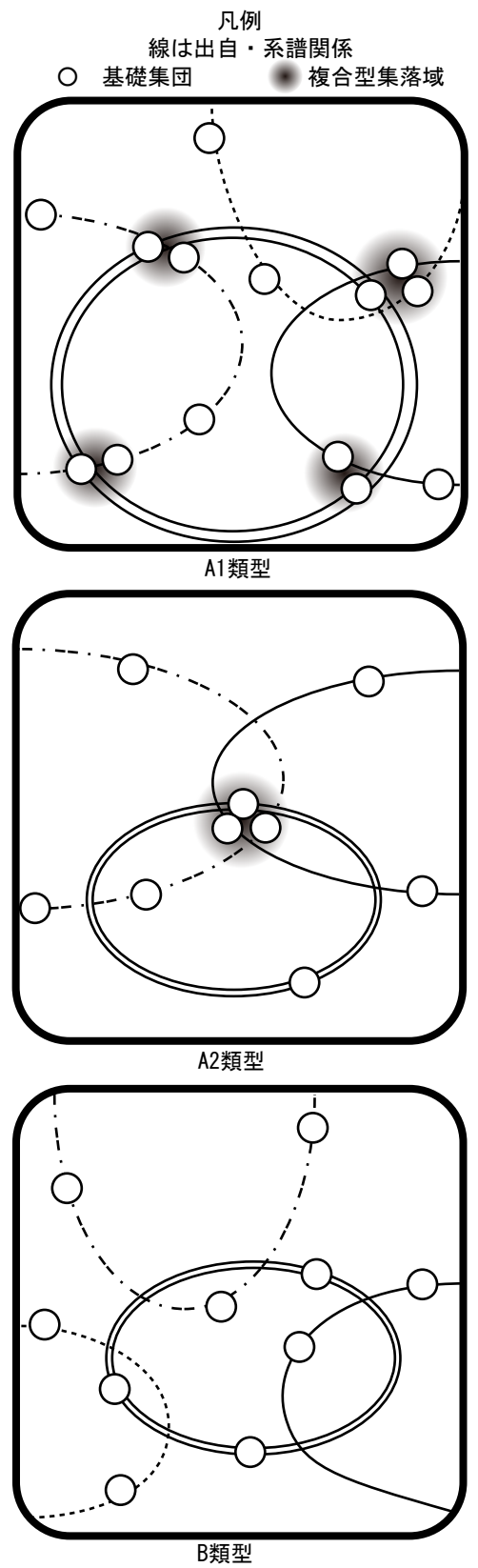


図5 10km 四方内での基礎集団配置と出自モデル



布パターンにおいても、基礎集団規模の集落形成が主体となる領域（B1類型）と、単位集団での集落形成が主となる地域（B2類型）の細分は可能かもしれない。ただ、発掘調査報告例が必ずしも潤沢とはいえ明確な比較は難しいため、本稿では明確な細分については今後の課題としたい。

いずれにせよ、明確なことは、さまざまな平野やそれに近接する段丘・丘陵部で多くの弥生集落が形成される弥生中期の近畿中部においては、詳細にみればさまざまな組み合わせパターンで集落・居住域が形成されている実態がわかる。ただし、B2類型とする可能性のある領域を除けば多くの地域で基礎集団単位での居住域形成がみられ、その分布の粗密により、近畿地方中部全体では各種集落分布パターンがモザイク状に状況を入り組んだ読み取ることが可能なのではないかと考えられる。

## (2) 近畿中部の他の平野部

大阪平野以外の地域では、居住域検出地点の分布はどのようなものだろうか。これについて、弥生中期後半様相2期〔若林2003〕の状況を確認したい。図3は、同時期の奈良盆地の居住域分布状況である。これをみると、盆地中央部に唐古・鍵遺跡や平等坊岩室遺跡、盆地南部に坪井遺跡・四分遺跡・大福遺跡・鴨都波遺跡といった複合型集落が複数確認され、A1タイプの分布形態といえよう。盆地南部の4遺跡については、中部の2遺跡に比べて個々の集落規模はやや小さくなるが、それでも一定領域に複数の複合型集落が存在する状態を認めることができる。しかし、盆地北部には複合型集落ゾーンは形成されておらず、Bタイプの分布パターンと示す。つまり、奈良盆地には、その内部に居住域形成に小・中地域差を看取することができる。また、盆地中部と南部の間には居住域形成の希薄な領域が広がっていることから、集団配置に偏在傾向を確認することができる。

また、図4には同時期の京都盆地～木津川水系についても同様な分布状況を提示した。ここでは、巨椋池東に市田斉当坊遺跡、桂川下流に神足遺跡といった複合型集落が確認できる。巨椋池周辺・桂川下流域にはA1タイプの居住域配置を認めることができよう。しかし、先述のように木津川に沿った南北に広い領域には中・小規模の居住域が点在する状況がみられる。また、京都盆地北・東部にも複合型集落は現状では確認できていない。つまり、巨椋池周辺以外は、Bタイプの集団分布を示すことがわかる。ここでも、大阪平野・奈良盆地にみられた集団配置に偏在傾向を確認することができる。特に、桂川下流域には、複合型集落だけでなく極めて高い密度で居住域形成地点が存在し、分布類型の違いだけでなく、遺跡形成の密度そのものにも中・小地域間で偏在傾向が認められる。この傾向は、同時期だけではなく弥生時代を通じて確認できることが伊藤淳史〔伊藤2005〕によって指摘されている。さらに、伊藤は、桂川流域については、墓群形成にも活発な様相がみられることを指摘している。

このように大阪平野で認められたように、居住域分布に中・小地域性があり、集団配置構造が多長に入り組みあった状態が近畿地方中部に一般的にみられる現象と考えることができる。

## (3) 集落分布パターンと集団関係

このような集落分布パターンと、諸地域社会の構造との関係はどのようなものなのだろうか。本稿では、特に階層化や墓群形成のありかたなどから集団関係の特質を指摘したい。この2つの問題を集落分布と関連させる上で、近年の3つの研究動向に触れて方形周溝墓群に関する認識の前提と

したい。

まずは、周溝墓群にみられる階層化傾向に関する議論である。大庭重信〔大庭1999〕は、河内平野の方形周溝墓群について、墳丘上の埋葬施設配列の分析を行った。そして、多数埋葬が行われものなかでも空間占有型とする配列が赤色顔料利用の埋葬施設と相関することを示した。つまり、こういった多数埋葬の中に上位階層墓を含む墓群の形成を認めことができるとし、特に中期後半にその増加傾向を重視した。その上で、この時期一定の階層化が進行したと指摘した。また、さらに別稿〔大庭2007〕で、複数埋葬墓について、単純な「家族墓」ではなく直系・傍系の区別なしの埋葬を想定し、複合的な同世代の血縁集団の表示があったとした。また、中期後葉～後期初頭にはこういった多数埋葬、の激増で河内平野の弥生方形周溝墓の墓が閉じられるとした。つまり、階層化系傾向の強い墓群のみが最後まで残存することを指摘していることになる。

一方、藤井整〔藤井2005〕は、複数埋葬は複数埋葬者（共同体成員でない小児までも含む）を前提とした埋葬であり、集団内の上位墓とする。階層差を強調した複数埋葬を含む群構成は弥生前期後葉の方形周溝墓成立期から存在していたとする。このように被葬者（集団？）相互の階層性を示すものとして分析を展開している。このように複数埋葬、特に3体を越える多数埋葬の見られる墓については、大庭同様に、階層化傾向を反映したものと考えている。

また、中村大介〔中村・秋山2004、中村2007〕は、周溝墓群への供献土器などのありようから、領域内での墓群相互の関係を類推している。たとえば、儀礼に伴い供献土器に穿孔が行われる群は、同一遺跡には複数存在せず、他の遺跡のある墓群にみられる。同じようなことが赤色顔料を用いた主体部における儀礼痕跡などにも見られるという。このことから、こういった儀礼行為の共通性を、墓群を形成する集団の出自関係（クラン）を示していると考えた。この考え方を援用すれば、筆者の指摘する基礎集団は、他の遺跡の遺跡に所在する基礎集団と出自関係で結ばれていることになる。

このように、近年の大阪平野を中心とした研究では、方形周溝墓群には多数埋葬を軸に階層化傾向を読み取り、儀礼痕跡から出自関係を類推することに力点が置かれ始めている。このような認識を基盤として、方形周溝墓群と集落分布形態の相関を調べるとどのようになるのだろうか図1には、居住域分布だけでなく3体以上の多数埋葬が想定できる周溝墓を複数含む墓群を追加して表記している。実際に1墳丘に3体以上の埋葬を確認したものの他に、供献土器が多数みられる墳丘も多数埋葬の可能性が高いと判断した。これは、大庭の分析〔大庭1992〕により、埋葬主体数に比例して供献土器数が増えることが明示されているため、墳丘が削平されている場合でも6個体以上の供献土器が認められる例については多数埋葬墓と認定して分析を進めることにした。

図1をみると、多数埋葬墓を含む墓群は、A1類型の集落分布地域は安定的に確認され、B類型となる領域では確認できない。さらに、河内湖の近辺では、特に多数埋葬を含む墓群が多く確認できることがわかる。この領域は、先の分類でみた基礎集団分布パターンのA1類型に相当する地域で、なおかつ各複合型集落の分布密度はきわめて高い。このことから、基礎集団の近接居住傾向が顕著な地域ほど、墓にみる階層化傾向が明確うかがわれることがわかる。A2類型の典型例と考えられる明石川流域などでも、このような多数埋葬墓群の多数検出はみとめられない。つまり、集団複合傾向の高さと墓にみる階層化傾向は比例関係にあると考えられる。しかし、一方では、周溝墓における埋葬には特定個人墓〔寺沢1991〕に分類できるような墓は確認できず、あくまで個人レベ

ルでの階層化ではなく特定の基礎集団内外の関係性の中で、その傾向が明示されていると考えたい。

すなわち、弥生中期後半における階層化傾向は、地域内の単純なヒエラルキーの存在の反映ではなく、多系列の集団の競合傾向が高まる状況下で明示されていることがわかる。この議論と、先述の中村大介の指摘〔中村 2007〕を総合すると、そういった競合関係は、個々の基礎集団間相互に単純に発生しているのではなく、その連鎖としてのいくつかの出自集団間の関係としても成立していると推定できる。言い換えれば、A1 類型の地域社会では、複数系統の出自集団が競合しながら、緩やかで不安定な階層関係を形成していることが類推できる。たとえば、筆者の分析〔若林 2001〕では、瓜生堂遺跡 / 巨摩遺跡 / 若江北遺跡では、土器小様式の変化につれて、多数埋葬を多く含む墓群は頻繁に移動していた。つまり、諸集団内外の階層化傾向は、固定的な地縁的成層関係に結びつかない状況が想定される。それ以外の地域、A2 類型の地域では、墓制に集団間の競争・競合的指向が看取しにくい。つまり、出自集団間の関係が単純で不安定な競合関係はみられないことになる。一方、他地域の例になるが、松山平野の文京遺跡などの A2 類型と考えられる領域では、集中的な手工業生産を行う集団が見られるという指摘もあり、A2 類型の集落配置地域にも、一定の集団間機能分化もしくはその背景に特定集団の優位化現象あったことが考えられる〔柴田 2008〕。このような場合には、複合型集落部の集団間関係が地域全体の出自関係集団間関係に単純に反映された可能性がある。つまり、墓制に階層化傾向が明示されない地域では、逆に出自集団の関係はそのまま固定的な社会関係に変換され地縁結合と不可分の状態となる余地が高かったと考えられる（図 5 のモデル図参照）。

このような社会の特質を列島内で一般化することができるなら、列島内の諸弥生地域社会の歴史的位置は、単純なヒエラルキーに基盤をもつ首長制的社会構造の形成過程だけでなく、部族社会的構造の極度の複雑化による流動的な社会統合の過程を含んでいると理解することが可能となろう。先述の集落分布形態の A2 類型は、集団間の競争関係が確認しにくいことから固定的集団関係があったことから前者の過程が単純に成立しやすい地域社会、A1 類型は競合と流動化が流動的に展開するような後者の過程の明確な地域社会とよぶこともできよう。近畿地方全域でみると、多様な社会統合の方向性をもった地域社会の連鎖として形成されている。

#### (4) 変化の方向性—近畿地方の場合—

この状態は、弥生後期になるとどうなるのだろうか。図 6 は弥生後期中葉における居住域分布を示したものである。筆者の土器編年〔若林 2003〕における、弥生後期様相 2 期の土器群が出土する居住域がここでは示されている。図中には、居住域の可能性の高い地点に黒丸記号を落としているが、筆者の既往の分析では、当該期の遺構形成の単位（基礎集団）は、径 100 ~ 200m (40000 m<sup>2</sup>以内) に収まることが判明しており、その領域を超えて遺構や・遺物包含層などの形成が認められる場合は、複数の黒丸記号として表現している。

図 6 をみると、図 1 に比べて居住域検出地点の数が増加していることが明確である。これは、河内湖周辺の平野部においても確認できるが、さらにその平野部に面した丘陵・段丘上にも居住域分布の増加が明瞭に認められる。このような弥生後期における丘陵・段丘上の遺跡増加傾向は、図 7・8 に示すように、単純に弥生時代における遺跡数増減を大別土器様式ごとに総計した場合にも確認



図6 大阪平野の弥生時代後期様相2期居住域検出地点

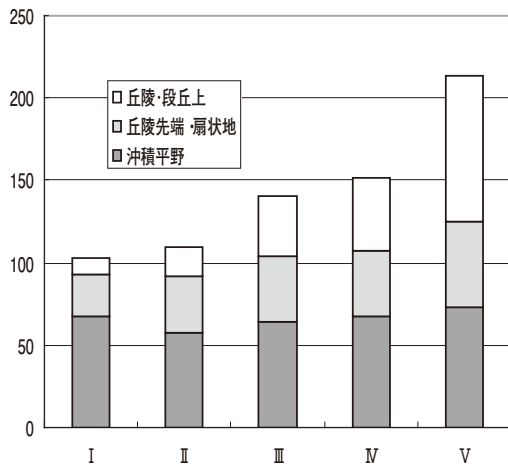


図7 大阪平野を中心とした  
弥生時代遺跡数の変化

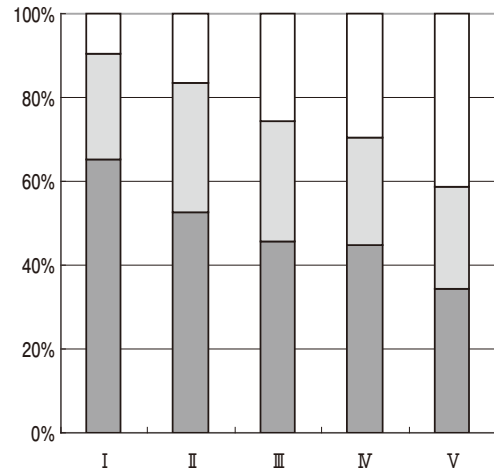


図8 大阪平野を中心とした  
弥生遺跡立地比率の変化

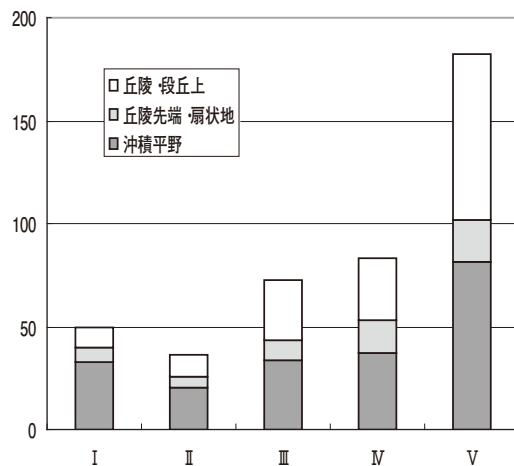


図9 奈良盆地を中心とした  
弥生時代遺跡数の変化

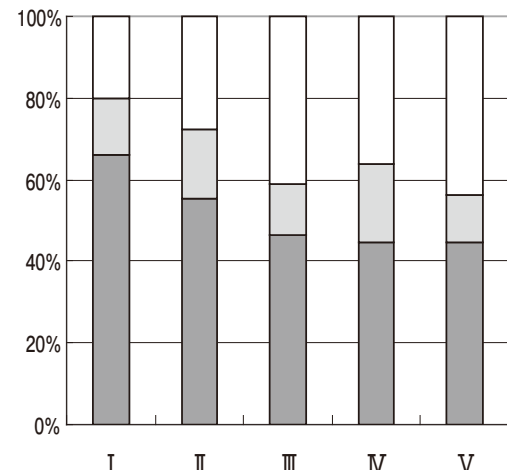


図10 奈良盆地を中心とした  
弥生遺跡立地比率の変化

できる。また、図9・10をみると奈良盆地でも、後期には沖積地遺跡数と丘陵上遺跡数が拮抗する状態が確認でき、大阪平野での変化の方向は、近畿地方全体でも一般性をもつと考えられる。

また、このように居住域分布数が増えた丘陵・段丘上では、基礎集団の集積する地点が確認できるようになる。典型例が確認できるのは、大阪湾南岸平野に面する丘陵地帯であり、観音寺山遺跡がその傾向を明瞭に示している。観音寺山遺跡では複数の居住域が近接存在する状況が、弥生後期前葉～後葉にかけて連続していることが確認されている〔若林2002〕。また、石川流域の寛弘寺遺跡〔藤田1999〕や駒ヶ谷遺跡〔仲原2002〕でも確認できる。特に、石川流域の遺跡では、このような傾向が古墳時代前期前葉にも及ぶ可能性が高い。

一方、後期における平野部の居住域形成は、中期後半に比べて複合型集落のような近接居住域分布を呈する地点は減少傾向にある。しかし、明確に消滅するのではなく、複合地点においては近接基礎集団数が減少傾向にあることがわかる。

つまり、後期になると、大阪平野近辺においては、丘陵・段丘地形が発達する領域にもA1類パターンの集落分布がみられ、一方では平野部の集落複合ゾーンの規模は小さくなっていく。つまり、中～後期にかけては、遺跡群間の地域差が解消され、全体として諸集団の分布形態は平準化されていく方向へと変化する。また、こういった中・後期間の集落変化については、大規模集落の解体が一気に進むかのような議論があったが、実際には長期間をかけて徐々に広域での平準化が進むと考えられる。古墳時代においては、一部地域に奈良盆地の纏向遺跡などの対規模遺跡の存在が報告されている〔寺沢2000〕が、古墳前期初頭以外の遺跡規模については詳らかではない。それ以外には、古墳時代に大規模集落遺跡の存在を指摘する議論は低調である。また、筆者の分析〔若林・田島1999〕では、古墳時代の河内湖周辺の遺跡群では、遺構形成や遺物分布の濃密な遺跡が看取できなくなることが明確になっている。このように古墳時代には大規模集落を含まない集団配置形態が主体になると考えられる。このことから、地域性の少ない集落配置は古墳時代には通有の景観であり、弥生時代後期の中で段階的に古墳時代的集落配置への変化が進行すると考えられる。

このような変化の図式は、弥生中期を中心に地域（農業共同体）首長を中心として大規模集落が形成され、その解体とともに首長居館と中・小集落へと変化するという旧来の解釈〔都出1989〕とはそぐわない。階層化傾向をもった周溝墓群を伴う顕著な複合型集落の形成は、実際にはより多核的な集団配置構造中で進行し、劇的な変化を伴わずに徐々に平準化していく。これは、多くの場合複合型集落の形成が小地域内の単純なヒエラルキー形成には結びついていないことを示している。おそらく、複雑化する地域社会の中で、出自関係などを媒介とした中・小規模集団の諸関係をとりもつ場として複合型集落が形成され、拡散とともに徐々にその役割を終えていったと考えられる。

### ③……………列島規模での地域性とその変化（弥生中期後半～後期）

#### （1）広域にみる変化の方向

近畿地方を検討するだけでも浮かび上がってきた地域社会形成の多様性を列島規模で検討するとどのようになるのだろうか。とはいえ、すべての地域を網羅的に検証することは難しい。ここでは、大規模集落＝複合型集落が形成されている地域に焦点を当てて比較を試みたい。

まず、弥生中期の段階で、複合型集落が10km四方内に複数形成される地域は、近畿中部の平野部以外には、福岡平野～佐賀平野といった北部九州地域が確実な例として挙げられる。もうひとつの候補は、濃尾平野である。濃尾平野では朝日遺跡が大規模な複合型集落として有名であるが、それ以外にも一色青海遺跡・岡島遺跡など複合型集落に近い規模・構造を持つ遺跡の内容が明らかになっている。しかし、北部九州・近畿中部・濃尾平野以外にはこういったA1類型の集落分布パターンを示す地域は、弥生中期に確認できない。

このうち、北部九州では、複合型集落の多数分布とともに、甕棺墓の配列関係の中に、出自集団とも考えられるソダリティの存在が認められることを溝口孝司〔溝口2008〕が指摘している。また、小澤佳憲〔小澤2008〕も同じ着想に基づいて集団関係を説明している。これらは、先述のように中



図 11 複合型集落を含む集落分布類型の地域相（弥生時代中期後半）

村大介〔秋山・中村 2004, 中村 2007〕が近畿地方の方形周溝墓に対して指摘したクランの連鎖構造と共通する指摘といえよう。このように、A1 類型の居住域分布構造を持つ地域では、出自・血縁系譜を軸とする諸集団の連鎖による地域社会の複雑化が進行している可能性が高いと考えられる。

これらの地域では、後期においても複合型集落が消滅するわけではない。小澤〔小澤 2006〕の指摘によると、北部九州では後期初頭には大規模複合型集落への集団凝集の傾向がみられ、その後そういった集団が凝集した居住形態が平野内にいくつも存在する状況が指摘されている。ただし、小澤〔小澤 2008〕はその過程で、優位集団の大規模化傾向に拍車がかかる状況を弥生後期に想定しており、中期よりも階層化傾向をもった集団関係を想定している。ただ、一定領域内に複数の基礎集団複合遺跡が看取できる状況そのものは連続している。濃尾平野では、石黒〔石黒 2006〕が指摘するように遺跡の増加傾向とともに、朝日遺跡での二集団の近接居住状況は維持され古墳時代初頭にはその集落構造に変化がみられる。つまり、近畿地方中部で確認されたように複合型集落は弥生後期にも残存している。つまり、弥生中期に A1 類型の集落分布パターンを示していた地域では、弥生中期に確認された多系統の出自集団群の連鎖としての社会構造は、弥生後期にも一定程度維持されたと考えられる。

一方、北部九州では複数の研究者〔寺沢 1991・中園 2004・溝口 2008〕の指摘するように墓制においては特定個人の析出も可能な状況はみられる。しかし、溝口〔溝口 2008〕が指摘するようにその首長系譜は決して安定的なものではなく、流動性を含んでいたことも同時に指摘されている。このことは、北部九州地域においても、ヒエラルキー維持構造が決して安定したものではなかったことを類推させる。

弥生中期に話を戻して、それ以外の複合型集落をもつ地域の様相を概観してみたい。四国地方については、文京遺跡を中心とした松山平野の文京遺跡における中期後半の状況〔田崎 2006・柴田

2008]の提示がある。ここでは複数の集団が一定の機能分化傾向をみせながら集合して複合型集落形成を行っていることが指摘されている。しかし、松山平野では、このような様相を見せるのは文京遺跡だけである。それ以外は、中・小型集落が点在する状況がうかがえる[柴田2008]。同じように、弥生中期後葉以後には、丸亀平野に旧練兵場遺跡を中心とした集落分布が認められるという[森下2006]。また、北陸南部でも弥生中期を通じての八日市地方遺跡が3つ以上の居住域+墓域の集合形態という様相をみせている。しかし、ここでも近隣に八日市地方遺跡の複合型集落を見つけることはできない[福海2002]。中部高地では、松原遺跡[馬場2007]が複合型集落と認識できるが、周囲には同規模遺跡を確認することは難しそうである。このように、弥生中期に著名な複合型集落を有する地域でも、北部九州・近畿中部・濃尾平野以外では、A2タイプの集落分布パターンを示す領域が多数を占めている。

このような弥生中期のA2類型地域では、文京遺跡のように明確な墓域が確認できない例や、八日市地方遺跡の方形周溝墓群や松原遺跡の土壙墓群のように、墓相互・墓群相互の階層化傾向が判然としない例が多い。つまり、近畿中部内の複数の小地域として確認されたA2・B類型集落分布パターン領域と同じように、多系列の出自集団の競合状態が確認しにくいという特徴は、近畿地方以外の弥生中期のA2類型地域にも当てはまる傾向といえよう。つまり、松山平野・北陸南部・中部高地では、図5のモデル図に示したような、出自集団の関係がそのまま地縁的な社会関係に変換されるような単純な地域社会構造が成立していたと考えられる。

しかも、上記の松山平野・北陸南部・中部高地ではこういった集落配置構造が弥生後期に維持されることはない。詳細な分析は提示できないものの、たとえば松山平野などではB類型あるいは、あまり大規模でない2基礎集団程度の規模による集落遺跡が平野内にいくつか認められるような状態へと移行していくように見える[柴田2008]。つまり、A2タイプの集落配置構造は長期継続する例は確認しにくく、平野部全体で均質な集団配置構造をとるように移行していくようである。また、濱田竜彦[濱田2006]によると山陰地方では弥生後期に妻木晩田遺跡群を代表例とするような丘陵・台地上の複合型集落が数kmごとに展開するという。これは明確なA1タイプの集落分布パターンといえる。つまり後期になって西日本各地では、A1タイプの集落分布パターンが確立したり、B類型あるいはA1類型に近い集落配置が一定領域で形成され、各平野部では、小地域間あるいは遺跡群間の集落形成の差異は小さくなる状況を想定することができる。

このような変化の状況が認められるとすれば、北部九州などでは遺跡群内での階層化傾向は読み取れるものの、西日本全体では集落形成にみる弥生時代後半期の遺跡群間関係は、「均質化」「平準化」へと移行しているという方向性を看取することができよう。他方、本稿で、近畿地方中部の内部において検証したことは、弥生中～後期にみえる集落分布パターンの小地域性の解消傾向である。同時に列島諸地域間にも地域性解消傾向をみとめることができた。集落分布パターンから読み取る限り、小地域間・大地域間ともに均質化・平準化の方向性が働いていること背景にはどのような実態があるのだろうか。

## (2) 想定される社会構造の変化

先にみたように、本稿では、溝口[溝口2006, 2008]・中村[中村・秋山2004, 中村2007]による



弥生墓制の分析視角に呼応する形で、これらの集落分布パターンの変化を解釈してみたい。A1 類型を出自集団連鎖による集団関係形成の証左と考えると、先に述べたように A2 類型は閉じた領域のなかで出自集団間関係が地縁的階層関係に転化しやすい集団相を示すと考えることができる。また、そういった地域の間には、集団競合的な社会編成原理自体の類推も難しい、B 類集落分布域も存在する。先に述べたように、地域間の集団関係構造差は弥生中期から後期への過程で変化し、等質化していく。

つまり、出自集団の連鎖が小平野や分節的な丘陵地形といった地理条件を越えて形成されることによって、複合型集落領域を核とした遺跡群間関係の広域での形成が進行しやすくなる。このような動きは、北部九州・中部瀬戸内・近畿などといった大地域内部での集団関係秩序の形成の背景として重要な要素と考えられよう。北部九州においては、中期の段階ですでに A1 類型の集落分布が丘陵地を含めて確立して出自集団連鎖による社会秩序維持が成立するため、後期にはそれが成層化する傾向が指摘されている [小澤 2008・溝口 2008] が、先述のようにこの関係が安定した地縁的紐帯に置き換えられることはないようにみえる。このような小地域差が解消傾向をみせて大地域差だけが残存していくような動態の帰結として、弥生後期における広形銅矛・突線鈕式銅鐸 (2 式以後)・三遠式銅鐸などといった大地域で祭式の共有、一方で大地域では異なる祭式が成立していくことが想起できよう。また、山陰地方の四隅突出型墳丘墓、近畿北部の台状墓の発達なども同じ脈略で説明することが可能であろう。つまり、大地域レベルでの集団紐帯の形成の背景として、本稿で指摘してきた大地域内部での遺跡群間関係の同質化傾向を挙げたいと考える。

また、その内部で等質化しつつある遺跡群間関係の統合地域相互の関係自体も、社会関係形成の重要な背景となってきたと考えられる。特に弥生中期に A2 類型が見られた地域では、後期への動きが均質化と捉え得たとしても、中期にすでに A1 類型が成立している地域が後期には同質の社会形態をとっていたということではなかろう。特に北部九州の集落・墓制にみられる変化は遺跡群間にも一定の成層的關係が存在していることが論じられている。近畿地方では、大規模な複合型集落の拡散傾向やそれともなう物資流通・土器製作体系などの変化が明確に進行しており、後期社会が中期に比べて変質したものであったことは留意しておかねばならない。本稿で指摘したことは、あくまで大きなバックグラウンドとしての遺跡群間関係の基本的な等質性の増大である。実際にはそういった遺跡群内での詳細な複雑化の様相には弥生後期にも細かな地域性も含まれていることはしておきたい。しかし、こういった平準傾向を持つことによって生じやすくなる諸地域集団関係性の比重の高まりは、後世の前方後円墳被葬者などという地縁的結合とも相関する首長権明示に結びついていく要素といえるのではないか。言い換えれば、弥生中期のように大地域間・中小地域間の社会統合形態に大きな差異がある状態から直接的に古墳時代に確認できるような地域首長の「同盟的」秩序が広域に成立する素地はないと考える。本稿でみたような変化の方向性を認識することによって古墳時代への移行を説明することが可能になると考える。

## まとめ

本稿で確認できたことは以下の 2 点である。

1) 列島各地において弥生中期には複合型集落形成の有無や形成される場合の集落分布類型に小地域間の差異は大きく、諸出自集団連鎖が形成する地域社会が多様であった状況が類推できる。

2) 弥生後期においては、大地域間の差異は残るものの、各大地域内部の遺跡群間の差異は縮小する傾向が広域で確認できる。これは、古墳時代における地域間関係の素地を形成していくと考えられる。

以上のように、集落分布の類型化とその変遷の地域性を考察することで、列島内諸地域の多様な社会構造や古墳時代社会への移行形態の前提を説明する糸口を提示できると考える。従来は、弥生中期の典型例とする、大規模集落の実態に古墳時代につながる集団関係の地縁的秩序をみようとする言説が複数〔都出 1989・1997, 広瀬 1998 など〕提示されてきた。しかし、その時期に関しては、列島規模での集団秩序を形成する背景は整備されていない。弥生後期への変化の要素・方向性は列島諸地域で多様であるが、冒頭にも述べたように、単純に集落分布のパターンをみることによってそこに共通した要素・変化の方向性を看取することはできる。そういった要素をキーワードとして考察を進める必要性を提案して、結びとしたい。

#### 追記

図1・2・3・4・6の地形図はカシミール 3D Ver8.8.2 (Copyright (c) 2005. SUGIMOTO Tomohiko.) をもとに作成した。

#### 参考文献

- 秋山浩三 1999 「近畿における「神殿」「都市論」の行方」『ヒストリア』第163号, 1～30頁  
秋山浩三 2005 「弥生大型集落断想(上)・(下)」『大阪文化財研究』第27・28号(財)大阪府文化財センター, 1～32頁  
秋山浩三 2007 『弥生大形農耕集落の研究』青木書店  
安藤広道 1991 「弥生時代集落群の動態－横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代集落遺跡群を対象に－」『調査研究集録』No.8 横浜市考古学財団, 133～164頁  
安藤広道 2003 「弥生時代集落群の地域単位とその構造」『考古学研究』第50巻1号, 77～97頁  
安藤広道 2005 「関東から見た近畿弥生社会」『シンポジウム記録5 畿内弥生社会の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる問題』考古学研究会, 3～28頁  
石村 智 2006 「多系進化と社会階層化」『往環する考古学：近江貝塚研究会論集3』近江貝塚研究会, 69～78頁  
伊藤淳史 1995 「京都盆地の弥生時代遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報1992年度』京都大学埋蔵文化財調査研究センター, 137～183頁  
伊藤淳史 2005 「国家成立前夜の遺跡動態」『国家形成の比較研究』学生社, 282～303頁  
大庭重信 1992 「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』26号, 大阪大学大学院文学研究科, 89～113頁  
大庭重信 1999 「方形周溝墓からみた畿内弥生社会の階層構造」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室, 169～184頁  
大庭重信 2005 「方形周溝墓制の埋葬原理」『月刊考古学ジャーナル』534号5～8頁  
小澤佳憲 2000a 「弥生集落の動態と画期」『古文化談叢』第44集 九州古文化研究会, 1～38頁  
小澤佳憲 2000b 「集落動態からみた弥生時代前半期の社会」『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会, 1～42頁  
小澤佳憲 2006 「北部九州の高地性集落」『古代文化』第58巻第2号, 59～68頁  
小澤佳憲 2008 「集落と集団1－九州－」『弥生時代の考古学8 集落からよむ弥生社会』同成社, 17～36頁  
近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻1号, 13～20頁

- 
- 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 田崎博之 1998「福岡地方における弥生時代の土地利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会, 113～138頁
- 田崎博之 2006「四国・瀬戸内における弥生集落」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表要旨集』, 17～44頁
- 酒井龍一 1982「畿内大社会の理論的様相」『亀井遺跡』(財)大阪文化財センター, 239～251頁
- 酒井龍一 1984「弥生中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』第3集, 37～51頁
- 柴田昌兎 2008「松山平野」『弥生時代の考古学 8 集落からよむ弥生社会』同成社, 224～239頁
- 田中義昭 1976「考古学研究会第21回総会研究報告 - 南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』22巻3号, 31～61頁
- 田中義昭 1979「南関東の弥生時代集落」『考古学研究』25巻4号, 44～51頁
- 都出比呂志 1983「環濠集落の形成と解体」『考古学研究』第67巻4号, 14～32頁
- 都出比呂志 1984「農耕社会の形成」『講座日本史1 原始・古代国家1』東京大学出版会, 117～158頁
- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 都出比呂志 1997「都市の形成と戦争」『考古学研究』第44巻第2号, 41～57頁
- 寺沢 薫 1979「大和弥生社会の展開とその特質」『橿原考古学研究所論集第四』吉川弘文館, 39～78頁
- 寺沢 薫 2000『王権誕生』講談社
- 中尾智行 2007「讃良郡糸里遺跡 - 集落と初期遠賀川 -」『近畿弥生の会設立10周年記念大会近畿の弥生時代は底を打ったか? 発表要旨集』近畿弥生の会, 28～34頁
- 仲原知之 2002「第2章位置と環境」『駒ヶ谷遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター, 3～10頁
- 中村大介・秋山浩三 2004「方形周溝墓研究と近畿弥生社会復原への展望」『爪生堂遺跡1』大阪府文化財センター, 499～542頁
- 中村大介 2007「方形周溝墓の系譜とその社会」『墓制から弥生社会を考える』六一書房, 73～116頁
- 馬場伸一郎 2007「大規模集落と手工業生産にみる弥生中期後葉の長野盆地南部」『考古学研究』第54巻1号, 47～67頁
- 濱田竜彦 2006「山陰地方における弥生時代集落の立地と動態」『古代文化』第58巻第Ⅱ号, 82～95頁
- 原口正三他 1977『高槻市史』第1巻 高槻市教育委員会
- 広瀬和雄 1998「弥生都市の成立」『考古学研究』第45巻第3号, 34～56頁
- 福海貴子 2002「第三章遺跡全体の概要」『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会, 17～22頁
- 藤井 整 2005「畿内の方形周溝墓制」『季刊考古学』92号, 雄山閣, 62～65頁
- 藤田道子他 1999『寛弘寺遺跡発掘調査概要Ⅴ』大阪府教育委員会
- マーシャル・サーリンズ 著・山内利記 1984『石器時代の経済学』法政大学出版局
- 松山聡他 1993「第四章第3節石器」『河内平野遺跡群の動態Ⅵ』(財)大阪文化財センター, 1～160頁
- 溝口孝司 2006「西からの視点」『シンポジウム記録5 畿内弥生社会の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる問題』考古学研究会, 29～58頁
- 溝口孝司 2008「弥生社会の組織とカテゴリー」『弥生時代の考古学 8 - 集落からよむ弥生社会 -』同成社, 74～95頁
- 三好孝一 1992「第二章 北遺跡群の地理的・歴史的環境」『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』(財)大阪文化財センター, 3～12頁
- 三好孝一 1999「河内湖周辺部における弥生中・後期の集落」『弥生時代の集落 - 中・後期を中心として - 発表要旨集』埋蔵文化財研究会, 9～16頁
- 森下英治 2006「瀬戸内の大規模密集型集落」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表要旨集』, 45～62頁
- 大和弥生文化の会編 1995『奈良県の弥生集落の集成』大和弥生文化の会
- Yoffee, N. 1993 Too many chiefs, Archaeological Theory: Who Sets the Agenda?, PP60-78. Cambridge University Press
- Yoffee, N. 2005 Myths Of The Archaic State, Cambridge University Press
- 若林邦彦 1997「中河内弥生中期土器にみる諸相 - 「生駒西麓型土器」のもつ意味 -」『考古学研究』第43巻第4号, 58～76頁
- 若林邦彦・田島夕美子 1999「弥生後期～古墳前期における河内平野南遺跡群」『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』大阪府文化財調査研究センター, 273～285頁
-

- 
- 若林邦彦 2001「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』第12号, 35～54頁  
若林邦彦 2002「河内湖沿岸における初期弥生集落の変遷モデル」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会, 225～239頁  
若林邦彦 2003a「近畿地方の土器」『考古資料大観第1巻弥生・古墳時代土器I』小学館, 181～241頁  
若林邦彦 2003b「基礎集団・遺跡群・弥生地域社会」『考古学に学ぶ(2) 同志社考古学シリーズⅧ』同志社考古学シリーズ刊行会, 139～156頁  
若林邦彦 2006「集落からみた「畿内」社会」『シンポジウム記録5 畿内弥生社会の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる問題』考古学研究会, 59～84頁  
若林邦彦 2006「丘陵上弥生集落と複合社会の拡大」『古代文化』第58巻第Ⅱ号, 96～105頁  
若林邦彦 2008「集落と集団－近畿－」『弥生時代の考古学8－集落からよむ弥生社会－』同成社, 36～57頁

(同志社大学歴史資料館, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年10月31日受理, 2008年12月5日審査終了)

---

## Yayoi Society as seen from Changes in Settlement Distribution Patterns

WAKABAYASHI Kunihiko

It is generally acknowledged that large-scale settlements consisted of a number of inhabited zones and that these settlements did not constitute a single group that had been reconfigured by a chief, although there is no clear picture of Yayoi society on which this assumption is based. Focusing on this aspect, this paper attempts to advance an explanation by applying a model to regions throughout the Japanese archipelago based on an analysis of the establishment of, and changes to, inhabited zone distribution patterns in the Kinki region.

An analysis of distribution patterns revealed the following types: Type A1 – formed by a number of compound-type settlements within an area of approximately 10 square kilometers; Type A2 – a single settlement; and Type B – a distribution of only small and medium-sized settlements. Type B was the main type in central Kinki during Early Yayoi, and while by Middle Yayoi many A1-type settlements were found in the lowlands, Type B predominated in regions with developed hilly and terraced terrain. Type A2 settlements also existed in the lowlands. In other words, by Middle Yayoi there were large differences in settlement distribution patterns caused by topographical conditions and other factors. The formation of many hierarchical square moated burial precincts of the kind typically found near Lake Kawachi developed in regions with a pattern of polynuclear settlements similar to the A1 pattern. The formation of many compound-type settlements is not connected to a simple hierarchical pattern centered on large-scale settlements. Subregional differences in settlement distribution had been eliminated by Late Yayoi, as on the whole the distribution of communities had become standardized. This settlement pattern with minimal regionality had become common by the Kofun period, and it is likely that during the Yayoi period gradual changes were underway to a Kofun period type of settlement pattern.

This sort of diversity in settlement distribution patterns in the Kinki region naturally explains the differences in the conditions and periods of the formation of compound-type settlements in lowlands across the Japanese archipelago. Clearly identified settlement patterns noticeable for polynuclear combinations of medium-sized and small groups in Middle Yayoi are found only in northern Kyushu and in central Kinki. Basically, there were also huge differences in circumstances between regions that made the transition from the simple A2 distribution pattern to Kofun society and those that changed from a polynuclear society to Kofun society.

Key words : Yayoi settlements, compound-type settlement, distribution pattern, hierarchy, Osaka plain

---